

最強鎌倉武士～元寇合戦記～（前編）

みなさまお待たせしました。今回の主人公は「鎌倉武士」です！えっ？あまりイメージないなっていう方も多いのではないでしょか。鎌倉武士を一言でいうなれば「強烈なモノノフ」です。とにかく強烈なんです（笑）。



時は鎌倉時代、世界は未曾有の危機におちいっていました。それはモンゴル帝国がユーラシア大陸の大部分を支配下に治め、東は高麗（朝鮮）、西はヨーロッパまで勢力を広げていた時代です。その勢いはとどまるところを知らず、日本にまでその魔の手を伸ばそうとしていたころです。そんなとんでもない時代に日本の舵取りを任せられたのが、わずか17歳の少年「北条時宗」だったのです。北条時宗は1268年（文永5年）、鎌倉幕府の第8代執権に就任します。この就任した年、いきなり事件が起きます。モンゴル帝国の5代皇帝フビライ=ハンから、高麗を通じて九州の大宰府に手紙が送られてきます。内容は簡単に言えば「我々に従え、従わねば兵を出すぞ」といった感じです。北条時宗は何とこれを黙殺（無視）します。世界最大・最強の国家のおどしを無視する時宗の心の強さには驚くしかないですよね。1971年に国号を「元」と変えたフビライ=ハンは、この後4回も日本に使者を派遣するのですが、ことごとく時宗は黙殺します。そして、とうとう1274年（文永11年）、元が日本に向けて出陣します。いわゆる「文永の役」の開始です。元軍はモンゴル人や漢人、高麗人の連合チームで、900艘もの船で約3万の軍勢でした。高麗を出港した元軍3万はまず、対馬に上陸します。そこで、対馬の守護代、宗資国（そうすけぐに）を先頭に80騎の鎌倉武士が元軍を迎撃します・・・。ここで「えっ？」となりませんか！80騎って・・・（笑）。8000騎でも4倍の敵なのに80騎って・・・400倍の敵ですよ！普通は逃げるか白旗を振って降参しますよね！せめて、防御陣地を敷いた山奥の城に立てこもるとか、隠れるとかしますよね！でも宗資国率いる80騎の鎌倉武士は、上陸してきた元軍に突撃をしかけたのです！正気の沙汰とは思えませんよね（笑）。その強烈さこそが『鎌倉武士』の魅力なんです！



まず、ここで鎌倉武士について少しふれたいと思います。鎌倉武士の合言葉は「一所懸命」なんですね。現代では「一生懸命」と言いますが、実は本来「一所懸命」が正しい言葉なんです。「一所」と言うのは、「自分の領土」という意味です。つまり、「土地のために命を懸ける=一所懸命」なんです。平たく言えば「命より土地のほうが大事」なんです！まず、土地というのは自分の家ぐらいのサイズを想像している人は大きな間違いです！大きさは武士によってさまざまですが、例えば右京区ぐらいをイメージしてください。そこにはたくさんの家来と、たくさんの百姓がいます。その百姓から年貢をとり、一族や家来を食べさせ生活をしているのです。つまり、武士は百姓を含め、たくさんの人の生活を背負っているのです。だからこそ、武士にとって領土は自分一人の命よりもはるかに大切なものです。だから、将軍のために一所懸命に戦って（奉公）、子々孫々のために新たな領土をもらう（御恩）のです。話を戻しますが、対馬の戦いでこの鎌倉武士80騎は当然のことながら全滅します！しかし、全滅するというのがまた鎌倉武士らしい。少し戦や戦争の歴史を知っている人なら分かると思いますが、本来全滅するまで戦うなんて日本人くらいです。普通は最大でも半分くらいやられたら戦略的に勝機がなくなるので退却するか降参するのですが、対馬の武士達は最後まで徹底的に戦いました。しかも予想を超える奮戦をします。大将である宗資国自身も部隊の先頭に立って戦い、1人で4人くらいは道連れにしたと言われています。詳しくはアニメ「アンゴルモア元寇合戦記」を見てください！ちなみに対馬は武士が討ち死にしてからはとんでもない地獄が待っていました。百姓がたくさん住んでいたのですが、男は殺され、女は手に縄を通して行かれたそうです。詳しくは日蓮宗の開祖日蓮の日記を見てください。その後、壱岐島でも同じようなことがあり、

10月20日、とうとう北九州に元軍が上陸します。日本軍はまだそこには参集しておらず、海岸にいた少数の警備兵を蹴散らし、本格的に軍隊は大宰府を目指します。元軍上陸のしらせを聞いた鎌倉武士達は元軍のもとに急ぎます。この時、近代戦争なら部隊が足並みを揃えて、高度な作戦を立て、大部隊が一糸乱れぬ行動をとり、それぞれの役割を果たして、包囲戦をするなり、相手を罠に誘い込むなりするものなのですが、鎌倉武士はそんな発想は全くありません！鎌倉武士の頭にあるのは早い者勝ちということだけです。普通は三万の大軍隊に対し、周りに味方がいなければ不安になり、味方が集まって来るまで待つものですが、鎌倉武士の発想は逆です。周りに味方がいなければ手柄を独り占めできるチャンスと考えるのです。今の発想で言うと完全に頭のネジが飛んでいますよね（笑）。実際この時日本軍の総大将少弐景資は日本にとって有利な地、博多にて迎撃戦をすると命令していたのですが、鎌倉武士がガマンできるはずはありません。実際最初に元軍を発見した肥後の御家人菊池武房は100騎ほどの家来を連れて突撃して、元軍を叩き、あろうことか退却させています。そして、たくさんの首を取った菊池武房が満足そうに帰ってきたところを遅れてきた同じ肥後の御家人、竹崎季長がすれ違います。竹崎季長は先を越されたことを悔しがり、元軍を追いかけ、わずか5騎で突撃をします。さすがに5騎で突撃とか命知らずも度が過ぎてますよね（笑）ちなみにこの竹崎季長こそが教科書に載っている蒙古襲来絵詞の武士なのです！その後も次々と鎌倉武士が参集し、激闘が繰り返され鎌倉武士が元軍を徹底的に叩き、日本の勝利で終わり、元軍は船に退却します。「お~い！みなさん総大将少弐景資の作戦聞いていました？」って感じですよね（笑）。鎌倉武士の恐ろしさはまだ続きます。船に戻って一安心の元軍に対し、小船に乗った鎌倉武士がさらに追いかけて首をとりまくります。元軍からしたらもはやトラウマになりますよね（笑）。つまり、文永の役での北九州の戦いはわずか1日で終わったのです。ちなみに元軍3万の内、1万3500人が帰って来なかつたそうです。それに対し、鎌倉武士の被害は195騎と下郎数不明だったそうです。この数字を見ても鎌倉武士の圧勝だったことが分かります。

あれ？学校で聞いた歴史と全然違うぞと思った人も多いと思います。それは太平洋戦争中に発行された歴史教科書に問題があります。しかもその内容は戦後の教科書にも継承されたため、間違った認識が現在でも続いているのです。特に「神風は？」ってなりますよね！神風は台風のことだよって習いましたよね！台風なんか来ていません！えっでも10月20日なら台風シーズンやん！と思いがちですが、これは旧暦10月20日。今の暦で言うと11月26日です。台風なんか来ません！せいぜい嵐くらいでしょう。つまり歴史を学ぶ上で大切なことは旧暦など知識を獲得すること、その上で嘘と本当を見分ける判断力や思考力、技能です！歴史史料を見る際、注意すべき点は、まず、①その史料はその時代に書かれたのか？②その出来事を見た人が書いたのか？③そう書いたら自分が得する立場の人か？④地理的、科学的矛盾がないか？などを見極める必要があります！文永の役の史料はたくさん残っています！例えば元や高麗の史料では日本軍をメッタメタに倒したと書いてあります。しかし、ではなぜ元軍は大宰府まで到達していないのか、なぜ1日で帰ったのか、なぜ夜には船に戻ったのか、勝っているなら陸上に拠点をつくり、対馬や壱岐のようにありとあらゆるもの奪い尽くすはずだなどの矛盾があります。台風が吹いて日本は勝ったというのは11月下旬ではあり得ないという④の科学的矛盾と、書いた人間の②③の矛盾があります。まず神風を多く書いているのは戦場どころか九州にも行ってない寺社仏閣の人たちです。彼らは「私たちの祈祷により神風が吹いて勝ったのだ！だから褒美をくれ」といっています。次に「集団戦法に対し、日本の武士は一騎討ちだったので苦戦した」という定説についてですが、日本が全て一騎討ちをしていたなどの記述はありません！そもそも一騎に何人かの下郎が着くのが当たり前の時代です。竹崎季長ですら一騎ではありません。「元は短い弓で連射ができるので有利だった」についてですが、逆でしょう！短い弓で飛距離とパワーがなかったので殺傷能力が低く、鎌倉武士は重装騎兵なので弓を数本受けたらいなら全く動じず戦った。それに対して、鎌倉武士の弓は長弓だったので元の射程外から撃たれ、しかも威力が強く、軽装の元軍はなす術がなく退却せざるを得なかつたでしょう！てつはうについては記述がほとんどなく、正直あまり意味がなかつたと考えます。えっ？でも教科書に載っている蒙古襲来絵詞では、元軍は集団に対し、竹崎季長一人だし、弓を食らって血出てるし、てつはう爆発してるしって思いますよね！あの絵よく見てください！明らかにおかしいでしょ（笑）それに気づければあなたは歴史能力が高い！一度自分の力で読み解いてください！予想以上に長くなつたので、元寇の第2ラウンド「弘安の役」はまた次回！次は14万の元軍が攻めてきます。